

同志社大学

同志社社史資料センター報



...Secretary
...ent.
...rounded
...cepting
...ign 2000
...high
...are are
...moran
a few horses in that famous
De-gema. The boat man
took me to the shore & showed
me all important streets could
save them only for 30 cents.
He took me to the tortoise shell
market 江崎屋敷. 可憐町.
I found my fine tortoise
shell worth 100 to my regret
I had not money to buy them.
At 2 P.M. We sailed out of
the harbor. The wind was
against us. I aspired
myself given away on the 7th
to make up the account of
the Home Missions Board. I
also saved letters to parents

in Kyoto. Beulah & also to Mr.
Hasky. I found myself
exhausted, used up. I left early
that morning & had a splendid
rest. Here I must not
forget to mention about our
steamer, Khiva. 440 horse
power. Capt. Peter Harris.
1st class passengers.
2d. There was one Russian
Priest & 2 Germans with
him. They go to Odessa.
At 6 Mrs. Joa boy brought
a cup of tea & a piece of Biscuit
Prakharu.

Emilie & she takes one
handle of trunk & her bus-
band takes another side &
go on the street



Little larger (a large horse had found.

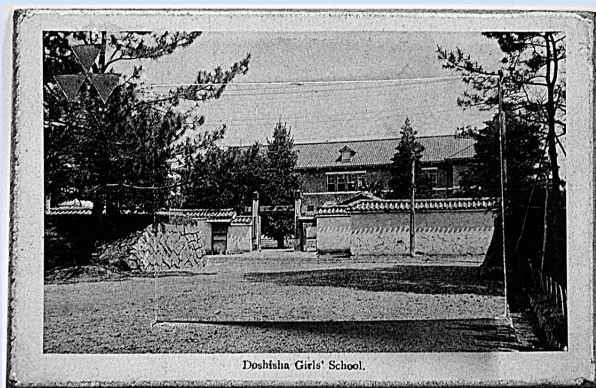
第2号
2005年度

1. コラム「やはりチャペルが」
2. 資料活動
3. 展示
4. 同志社創立130周年記念
展示会報告
5. コラム「最初の社史資料調査員として」
6. 公開講演会
7. 研究活動
8. 第162回新島襄生誕記念会
9. 第163回新島襄生誕記念会
10. 新島旧邸
11. 委員会

やはりチャペルが

社史資料センター所蔵の写真資料を整理して、また新たな発見や学習ができた。

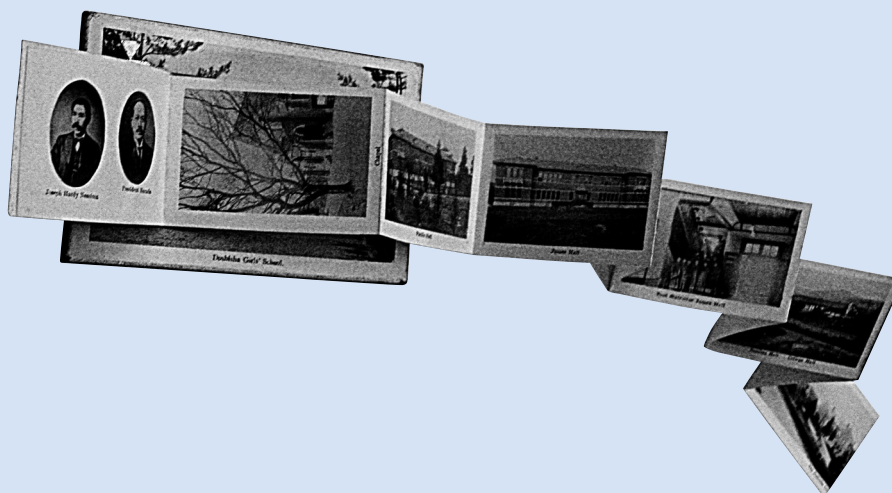
堀内清氏寄贈のPOST CARDが写真資料の中に紛れ込んでいた。「女子部景観」と題した紙袋の中の9×14cm大のものである。



これは単なる郵便はがきではない。中央に5.5×8cmの埋め込みがあって、ここにいくつかに折り曲げた昔懐かしい写真が入っている。これを引っ張り出すと80cm長になる。

表紙(蓋)には京都御所より今出川通り越しに同志社女学校正門、裏表紙にはNeesimaと第7代社長Haradaが写っている。

そして、最初に若木のエノキを配したChapel、以下、Pacific Hall, James Hall, North View James Hall, East Stair-case James Hall, Peace Dormitory, Neesima Hall College Hall, Graduates, The Doshisha College Campusの写真が配置されている。



このPOST CARDがつくられたのは、第7代社長(総長)原田時代の、明治の末から大正の前期頃と思われる。

同志社今出川キャンパスに多くの学び舎や景観があるが、いつも最初にとり上げられるのは、チャペルである。

山田 興司(非常勤嘱託職員)

資料活動

1. 資料整理

(1) 新島旧邸文庫資料

2003年度に新島旧邸より移管した新島家所蔵の資料1,683冊(含、逐次刊行物)は劣化の著しい資料が多数あり保存処理が必要である。劣化・損傷の激しい資料については2年計画で専用の保存箱を作成した。2004年度は470冊、2005年度に477冊、計947冊の資料について保存箱を作成した。

※前年度センター報にて初年度の冊数に誤りがありました。(誤)949冊→(正)947冊

(2) 社史資料センター所蔵写真資料

前年度に引き続き、社史資料センター所蔵の同志社関係写真資料格納スチールケース(引出し1～10)の、引出し4～8までの整理(写真特定、デジタル化、サムネール印刷等)を行った。整理点数は1,990点で、その内容を下記に示す。

- 【引出し4】 新島襄書簡等……………403点
- 【引出し5】 新島襄宛書簡等……………171点
- 【引出し6】 初期宣教師、初期教務資料、同志社病院、新島夫人と日赤、新島展……………369点
- 【引出し7】 明治期の女子部より現在の女子部
(幼稚園、女子中高、女子大学、同窓会)……………296点
- 【引出し8】 同志社各校学生生活、各地の校友同窓、各総長時代の校友同窓等、
校友会出版物等、同志社出版物表紙、同志社各校印影……………751点

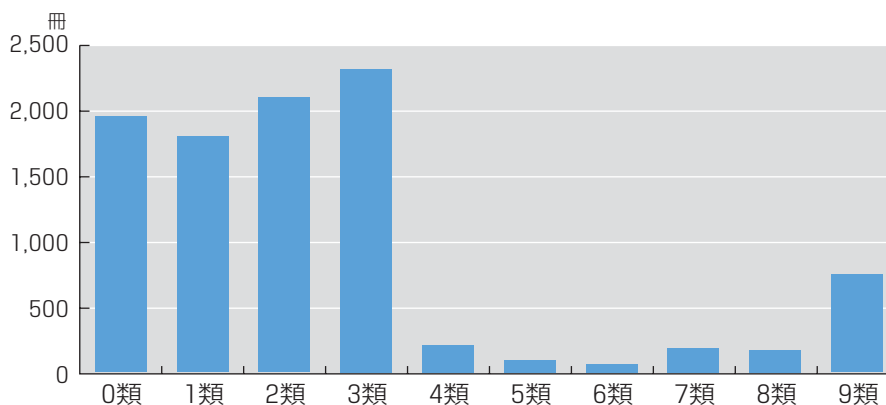
社史資料センター網別蔵書冊数

(3月10日現在)

	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90	類合計	比率
0類	0	46	224	36	74	3	28	21	106	1,422	1,960	20.1%
1類	14	8	206	33	24	140	44	18	75	1,247	1,809	18.6%
2類	57	951	99	39	0	30	0	0	775	160	2,111	21.7%
3類	109	151	138	130	7	12	133	1,602	10	31	2,323	23.8%
4類	28	21	14	9	10	19	30	21	18	49	219	2.2%
5類	8	9	45	7	6	3	5	4	10	10	107	1.1%
6類	12	23	1	0	0	2	3	23	8	3	75	0.8%
7類	21	2	73	9	12	18	31	3	22	7	198	2.0%
8類	7	69	15	65	9	4	0	2	1	10	182	1.9%
9類	29	502	113	86	23	2	0	0	2	1	758	7.8%

※日本十進分類法による分類

総冊数 9,742冊



2. 資料提供(写真資料を中心に)

2005年

- 4月 4日 『新島襄の信仰生涯と同志社大学』(テレビ番組「生命之光」収録のため)『新島襄—その時代と生涯—』掲載写真25点をキリスト聖書塾映像部へ貸出
- 7日 『知るを楽しむ・京都モダン』(NHK教育)収録のため同志社初期の写真4点をNHK京都放送局へ貸出
- 5月 11日 『週刊ビジュアル日本の合戦』第9号(講談社)に掲載する「新島旧邸」の写真を株式会社浩気社へ貸出
- 6月 25日 『明治・大正・昭和の建築～京都篇～』(BS)、『日本の近代化遺産・京都篇』収録のため、株式会社オルタス・ジャパンに同志社初期の写真11点を貸出
- 27日 『同志社大学剣道部百年の歩み』に掲載する同志社関係写真37点を同志社大学剣道部へ貸出
- 『京都女性』に掲載する「新島旧邸」の写真2点を京都地域女性連合会へ貸出
- 7月 19日 『会津人群像』No.5に掲載する「新島八重」関係写真12点を歴史春秋出版株式会社へ貸出
- 8月 2日 日本基督教団熊本草葉町教会に「奉教趣意書」のレプリカ作成を許可
- 9月 5日 幕末歴史エッセイ「会津女性・山本八重の戊辰戦争」(『ビックコミック1(ワン)』(小学館)に掲載する「新島八重」の写真3点を小学館コミックス編集室へ貸出
- 29日 『大阪ガス100年史』に掲載する「下村孝太郎」関係写真3点を大阪ガス株式会社へ提供
- 12月 19日 「坊ちゃん100年」(朝日新聞・愛媛版)に掲載する「弘中又一」の写真を朝日新聞松山総局へ貸出

2006年

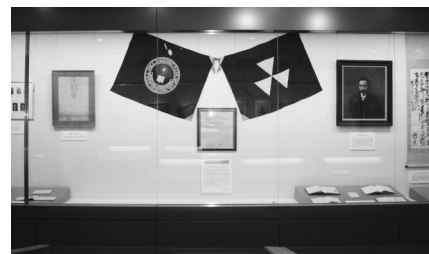
- 1月 13日 「山本覚馬」、「新島八重」の写真を会津若松市観光課へ提供
- 19日 『京都橘大学看護実践異文化国際研究センター ニュースレター』創刊号に掲載する「同志社病院と京都看病婦学校」の写真を京都橘大学看護学科へ貸出
- 24日 『歴史街道～ロマンへの道～』収録のため、朝日放送株式会社に取材協力
- 2月 9日 『結衆・結社の日本史 結社の世界史1／福田アジオ編』に掲載する「同志社英学校余科1期卒業生」の写真を株式会社山川出版社へ提供
- 22日 『いまばりNOW』(南海放送テレビ)収録のため、『新島襄—その時代と生涯—』の掲載写真4点を愛媛県今治市役所総務部広報公聴課へ提供

展示

2005年度は2回のNeesima Room企画展を実施し、Doshisha Spirit Week(キリスト教文化センター)、新島会館およびラーネッド記念図書館への展示協力を行った。

1. Neesima Room企画展

- ・春学期(第27回企画展)
2005年4月1日(金)～8月31日(水)
テーマ:「同志社とアーモスト」
- ・秋学期(第28回企画展)
2005年10月1日(土)～2006年2月28日(火)
テーマ:同志社創立130周年記念「新島襄と同志社」



2. 展示協力

(1) Doshisha Spirit Week

- ・春学期 2005年4月11日(月)～15日(金)
「徳富蘇峰と熊本バンド」をテーマに23点のパネル展示を行った。展示内容は「青年の徳富猪一郎(蘇峰)」「新島襄校長と初期の英学校生徒」「熊本洋学校校舎」「奉教趣意書」「熊本洋学校時代の熊本バンド」「三十番教室」「L.L.ジェーンズ」、熊本バンドのメンバーなど。
- ・秋学期 2005年11月5日(土)～11日(金)
「同志社とアーモスト」をテーマに25点のパネル展示を行った。展示内容は「同志社アーモスト館」「アーモスト大学時代の新島襄」「A. ハーディー」「J. H. シーリー」「アーモスト大学 ジョンソン・チャペル」「友志園(アーモスト大学日本庭園)」「S. B. ニコルズ(第一回アーモスト大学学生代表)」「同志社アーモスト館献堂式」「O. ケーリ」「W. M. ヴォーリス」「同志社大学・アーモスト大学交歓演奏会」など。

(2) 新島会館

- ・春学期 「函館からボストンへ」をテーマにDoshisha Spirit Weekで展示したパネルのうち20点の展示を行った。展示内容は「函館から脱国した際の扮装を再現する新島襄」「福土成豊の旧宅(札幌)外観」「函館ハリストス正教の会堂」「『新島襄海外渡航之处碑』除幕式」「W. T. セイヴォリー船長」「H. S. テイラー船長」など。
- ・秋学期 「熊本バンドと徳富蘇峰」をテーマにDoshisha Spirit Weekで展示したパネルのうち21点を展示した。

(3) ラーネッド記念図書館

ラーネッド記念図書館主催展示『英学の歩み』(2005年6月)に新島襄旧蔵の英書“Dicken’s Dictionary of London”、“Dictionary of the United States Congress”、“A Comprehensive Dictionary of the English Language”、“A Pocket Dictionary of the English Language”、“A New Pocket-Dictionary of the English and Dutch and English Language”、“English-Italian and Italian-English”、“A Latin-English Dictionary”7点や写真パネル2点を含めた計9点の資料を提供するなど展示協力した。

1. 展示概要

「新島襄の生涯と同志社英学校から現在の同志社までを展示で紹介する」ことを大きなテーマとして写真パネル全体を構成し、ここに講演会が実施される各地と同志社の関係を表す資料を組み合わせ、各会場それぞれ独自の展示会を企画した。展示会のメイン・コンセプトは、新島から継承してきた同志社の建学の精神を広く周知してもらうことで、先進的並びに普遍的ともいえる新島の教育思想を伝え、同志社建学の理念をより深く理解してもらえるような展示を目指した。



2. 各地の講演会の概要

札幌講演会

日時：2005年6月19日(日)、20日(月)

場所：JR札幌駅地下街アピライラックホール

講師：伊藤 彌彦氏 (同志社社史資料センター所長)

6月19日「新島襄と徳富蘇峰」

6月20日「新島襄と徳富蘆花」

福土成豊(卯之吉)、W.S.クラーク、大島正健や有島武郎の資料なども展示。
展示会の来場者は約140名で、講演会参加者は両日で約50名。

仙台講演会

日時：2005年7月23日(土)、24日(日)

場所：エル・パーク仙台6階ギャラリーホール

講師：太田 雅夫氏(元桃山学院大学教育研究所教授)

7月23日「新島襄と東華学校」

7月24日「新島襄・柏木義円と吉野作造」

東華学校、吉野作造関係資料を展示。
展示会の来場者は約150名で、講演会参加者は両日で約100名。

熊本講演会

日時：2005年10月1日(土)、2日(日)

場所：鶴屋百貨店東館7階鶴屋ホール

講師：野本 真也氏 (同志社理事長)

10月1日「新島襄の人と思想」

講師：伊藤 彌彦氏 (同志社社史資料センター所長)

10月2日「新島襄と徳富兄弟」

「熊本バンド」コーナーを特設。
展示会の来場者は約340人で講演会参加者は約220名。

京都講演会

日時：2005年10月27日(木)～11月1日(火)

場所：大丸京都店6階多目的ホール

講師：八田 英二氏（同志社大学長）

10月29日「新たな改革に向けて」

講師：野本 真也氏（同志社理事長）

10月30日「新島襄の志」



同志社内の諸学校の写真パネルや、新島会館が所蔵する肖像画など、展示品の総数160点以上。展示会の来場者数は約7000名で、講演会参加者は両日で約310名。

名古屋講演会

日時：2005年11月12日(土)、13日(日)

場所：ナディアパーク3階デザイン・ホール

講師：井上 勝也氏（同志社大学名誉教授）

11月12日「新島襄と森有礼—彼らは明治国家の近代化をどのようにして実現しようとしたか—」

11月13日「同志社大学に学び教えて50年—私と新島襄—」

同志社のシンボルでもある同志社徽章やカレッジ・ソングに関する資料を展示。展示会の参加者は約280人で、講演会参加者は両日で約150人。

安中講演会

日時：2005年11月19日(土)、20日(日)

場所：安中教会

講師：本井 康博氏（同志社大学神学部教授）

11月19日「千里の志—新島襄の人と思想—」

11月20日「同志社130年—建学精神と今—」

「自責の杖」や新島の聖書、湯浅治郎関係の資料を展示した。展示会の参加者は約330人で、講演会参加者は両日で約230名。

東京新島講座

日時：2005年12月10日(土)、11日(日)

場所：六本木ヒルズ(六本木アカデミーヒルズ49階タワーホール)

講師：北垣 宗治氏（同志社大学名誉教授）

12月10日「新島研究豊饒の年」

12月11日「『新島襄の手紙』へのアプローチ」

同志社の伝統や建学の精神を重点的に展示で表現。展示会の来場者は約240名で、講演会参加者は両日で約180名。



同志社創立130周年記念「新島襄と同志社」展について

2005年、学校法人同志社は創立130周年を記念して、新島襄ゆかりの土地を中心に全国7ヶ所(札幌、仙台、安中、東京、名古屋、京都、熊本)で講演会と展示会を実施した。講演会は新島研究に携わる方々が、展示会は同志社社史資料センター(以下、センター)が担当した。展示の内容に関しては、新島襄の生涯と同志社の130年を一覧できる写真パネルと資料を基本的な構成とし、これに同志社と各地開催地との関係を示す写真パネルや資料を加えて、各開催地独自の展示会を構成した。例えば、札幌ではセンターが所蔵するW.S.クラークの書簡や、有島武郎が本学に寄贈した『イプセン全集』(本学文学部英文学科所蔵)を展示した。仙台では、「仙台の同志社分校」とも例えられる東華学校に関する資料や、希少本の文芸雑誌『東華』第1号と第2号(宮城県第二女子高等学校所蔵、同校は東華学校の後身)、その他吉野作造に関する資料を展示した。熊本では「熊本バンド」コーナーを設置し、彼らにゆかりのある資料を展示した。その他、熊本草葉町教会から依頼されていた「奉教趣意書」のレプリカを山下慶親牧師に手渡した。これは同教会が熊本バンド結盟130周年を記念して作成されたものである。安中では、新島ともっともゆかりのある土地ということで、新島襄のいわば定番ともいえる資料である「自責の杖」や新島が愛用した「聖書」などを展示した。そのほか、同志社の初期から財政、教育などの面で尽力した湯浅治郎や、彼の弟である湯浅吉郎(半月)に関する写真パネルや資料をおいた。なかでも湯浅吉郎が考案した同志社徽章(校章)に関するメモ書きは、来場者の目を特に魅いていた。今回の展示会で最大規模を誇ったのは京都であった。地元開催という利点から数多くの資料を出品し、展示品総数が160点に及んだ。写真パネルや絵画、書簡をはじめ、新島の生活用品、衣類、書簡、遺墨などに加え、同志社内の諸学校に関する写真パネルに各学校の教職員による進学相談、本学学生有志による様々なイベントも開催され、大盛況であった。

今回の記念事業は、同志社として、全国各地で展示会各地と交流を図ることができたことは意味のあることであった。また、開催地の方々のご協力と学内の方々のご尽力で記念事業を無事終えることが出来たことを感謝したい。

(社史資料調査員 小枝 弘和)

最初の社史資料調査員として

私は同志社が創立100周年を迎えた1975年に生まれ、創立130周年を記念する2005年に同志社社史資料センター(以下、センター)初の社史資料調査員(以下、調査員)となった。母校に貢献できる仕事に就いたことは私にとって大変な喜びであった。実際、調査員としてセンターに関わると、その担当する仕事量に驚いたが、1年間1つ1つの職務を確実に遂行することを意識してきた。

調査員の業務について述べると、業務の内容は、センターが所蔵する資料の整理、収集、調査、保存、Neesima Room企画展の準備やホームページの管理、そして一般事務その他ということになる。なかでも中心となる業務はNeesima Room企画展の準備で、これには資料の整理、収集、調査、保存という4つの要素がすべて含まれる。大きな流れは、まず、企画展のテーマを設定し、それに従って資料を収集、整理し、展示のための資料を選出して、目録を作成する。そして、展示資料の調査を行い、説明キャプションを作成し、資料を展示するという流れである。最終的には、企画展の内容や、その準備過程で判明した新情報や新事実などを、センターが発行する機関誌などを通じて公表することであるが、これは私が今後取り組まなければならない大きな課題である。

企画展以外では、「新島家旧蔵写真」データベースへの情報入力、既にデジタル化されている新島遺品庫資料の再点検、その他の所蔵資料や寄贈資料の整理と保存など、既に整理されたもののメンテナンスも行っている。また、学内外からのレファレンスも随時あり、今後一層全体の業務を能率的、合理的に遂行していく努力をしていかなければならない。

その他、私が刺激を受けたものとして、全国大学史資料協議会での意見交換がある。大学の年史編纂を視野に入れた資料収集やその方法論、特に、過去の資料に比べ、現在、未来の資料に対する認識と収集方法論には示唆される事が多々あった。同志社も創立130年を過ぎ、10年後、20年後には学園史を編纂する作業に掛かると思われる。画像や「モノ」など、どのような形態であれ、「歴史を残す」ということを現在から意識して資料を扱わねばならない。また、全国の大学において調査が進んでいる太平洋戦争期、もしくはそれ以後の資料収集や調査も行う必要があると思われる。こうした未開拓の課題にも積極的に取り組んでいきたい。

センターは多くの研究者の方々が出入りする場で、自ら求めれば与えられる場である。自省をしつつ、謙虚さを忘れず、課せられた課題を意識しつつ、今後も調査員として励んでいきたい。

社史資料調査員 小枝 弘和

公開講演会

Neesima Room企画展のテーマに添った講演会を2回実施した。

・春学期：「私とアーモスト—アーモスト館建設前後—」

講師：樋口秀雄氏(同志社大学名誉教授・アーモスト大学代表)

日時：2005年5月19日(木) 15:00～16:00

場所：ハリス理化学館1階会議室(同志社大学今出川キャンパス)

・秋学期：「同志社130年」

講師：百合野正博氏(同志社大学商学部教授・学生支援センター所長)

日時：2005年11月8日(火) 14:00～15:00

場所：至誠館1階3番教室(同志社大学今出川キャンパス)



研究活動

機関誌の刊行や第一部門研究(新島研究)の研究会は次のとおりである。

1. 同志社談叢

『同志社談叢』第26号 A5版192頁 2006年3月発行

論叢	新島襄とシアーズ家の人びと 社会主義詩人児玉花外の研究(三) ミス・デントン来日の前後(二) 条約改正交渉中止前後における同志社大学設立運動 1889~1890(二)	本井 康博 太田 雅夫 日比 恵子 宮崎 晶行
資料紹介	河原林家文書中の新島襄と新島八重子書簡 J. D. デイヴィスとN. G. クラークの往復書簡(3)	高久嶺之介・竹内くみ子 森永長壹郎
翻訳	「同志社の土着化」(1875~1919)(その6)	北垣 宗治

2. 第一部門研究(新島研究)研究会

- 第57回例会 | 2005年4月18日(月)
・『新島研究』96号掲載論文の合評
・「新島襄と内村鑑三ー内村鑑三の視点からー」
報告者: 中森 厚氏
コメンテーター: 井上 勝也氏
司 会: 大鉢 忠氏
・「福土成豊と北海道の地形測量」
報告者: 上西 勝也氏
コメンテーター: 北垣 宗治氏
司 会: 大鉢 忠氏
- 第58回例会 | 2005年5月16日(月)
・「福土成豊と北海道地形測量ー余話」
報告者: 上西 勝也氏
- 第59回例会 | 2005年6月20日(月)
・「ニコライ大主教と新島襄」
報告者: 林 裕三氏
- 第60回例会 | 2005年7月11日(月)
・「太田雄三著『新島襄』(ミネルヴァ書房、2005年4月)をめぐって」
報告者: 北垣 宗治氏
報告者: 本井 康博氏
報告者: 井上 勝也氏
- 第61回例会 | 2005年8月6日(土)
・「新島襄の平民主義」
報告者: 坂井 誠氏
司 会: 本井 康博氏
・「新島襄の学んだニューイングランド、
フィリップス・アカデミーと当時のカリキュラム」
報告者: 井上 勝也氏
司 会: 太田 雅夫氏
・「内村鑑三の弟子斎藤宗次郎」
報告者: 児玉 佳與子氏
司 会: 北垣 宗治氏



-
- 第62回例会 | 2005年10月17日(月)
 ・「8月に刊行されたガイドブックとニューイングランド・ツアーをめぐって」
 報告者:井上 勝也・北垣 宗治・本井 康博・竹山幸男 各氏
- 第63回例会 | 2005年11月21日(月)
 ・「新島襄はなぜ『平民』となったか」
 報告者:竹内 力雄氏
- 第64回例会 | 2005年12月19日(月)
 ・「同志社編『新島襄の手紙』(岩波文庫)について」
 報告者:北垣 宗治氏
 ・「『新島襄の手紙』(岩波文庫、2005年10月14日)編集裏話」
 報告者:本井 康博氏
- 第65回例会 | 2006年1月23日(月)
 ・「新島襄と幕末維新の動乱―天誅組の烈士原田亀太郎との交友を中心に―」
 報告者:八木橋 康広氏
- 第66回例会 | 2006年3月15日(水)
 ・「アーモスト大学アーカイブズが所蔵する新島襄関係資料について」
 報告者:Ms.Daria D' Arienzo(アーモスト大学主任アーキビスト)
 通 訳:北垣 宗治氏

『新島研究』第97号 A5版345頁 2006年2月発行

- | | | |
|----|---|-------|
| 論叢 | 新島襄の「平民」戸籍の創出と平民主義 | 竹内 力雄 |
| | 新島襄の学んだニューイングランド、
フィリップス・アカデミーと当時のカリキュラム | 井上 勝也 |
| | 新島襄の平民主義と人民観 | 坂井 誠 |
| | 山本唯三郎と天津 | 藪田謙一郎 |
| | 「同志社大学設立の大意」の検討 | 太田 雅夫 |
| | 内村鑑三の弟子・斎藤宗次郎―書誌の紹介の中で― | 児玉佳與子 |
| 書評 | 太田雄三著『新島襄』批判 | 行天 博志 |
| | 太田雄三著『新島襄』を読む | 服部 泰夫 |
| | 太田雄三著『新島襄』を読んで | 井上 勝也 |
| | 太田雄三氏の『新島襄』を読む | 北垣 宗治 |
| | 太田雄三著『新島襄』を読んで | 宮澤 正典 |
| | 太田雄三先生への手紙 | 森永長壹郎 |
| | 顕彰と検証のバランス―ある新島襄伝の波紋― | 本井 康博 |
| | プレゼンティズムの陥穽 | 吉永契一郎 |

第162回 新島襄生誕記念会

日時：2005年2月10日(木) 17:00—19:30

場所：同志社新島会館大研修室

表彰

新島研究功績賞 宮澤正典氏（同志社女子大学名誉教授）
坂本清音氏（同志社女子大学特任教授）

記念講演

演題：「早稲田で教えた新島襄の5人の弟子たち」

講師：北垣宗治氏（同志社大学名誉教授）

新島襄生誕記念懸賞論文（2004年度）

入選者

【中学校の部】

最優秀賞 上田 倫子（同志社国際中学校1年）
「新島襄先生が書いた手紙について」

優秀賞 大黒 舞香（同志社女子中学校1年）
「新島襄について」

木下 史子（同志社香里中学校1年）
「新島襄の人の心を動かす力」

佳作 井上 麗（同志社中学校1年）
「新島襄の志」

大澤 仁美（同志社国際中学校1年）
「函館からボストン展を見て」

横山 友子（同志社女子中学校1年）
「私達が引き継ぐこと」

【高等学校の部】

最優秀賞 小村 愛美（同志社国際高等学校3年）
「明治期における同志社と仏教」

優秀賞 大塚 美欧（同志社国際高等学校3年）
「Christian Education is Power~Joe's Aim to Change Japan~」

山畑 譲（基督教独立学園高等学校3年）
「新島襄の説教、信仰のパッション」

佳作 木水 恵梨奈（同志社国際高等学校3年）
「A Father-Son Bond~Indispensable for Each Other~」

長嶋 志生奈（同志社女子高等学校3年）
「未知を求めて~ロビンソン・クルーソーとは~」

根津 真由（新島学園高等学校3年）
「信仰のうちに輝いた新島襄」

フィオードロワ・アナスタシア（同志社国際高等学校3年）
「新島襄とニコライ神父」

奨励賞 高曲 伸和（同志社高等学校1年）
「新島襄と自分」

新島襄先生が書いた手紙について

上田 倫子 (同志社国際中学校1年)

国禁を犯してまで外国に行き、様々な事を学んできた新島襄先生。家族と別れ、次に会った時はほぼ10年ぶり。(1864年、新島先生21歳~1874年、新島先生31歳)新島先生はその長い年月の海外生活の間や、帰国の挨拶や同志社大学設立運動などの用事で家を離れていた間、父や祖父や弟、脱国に協力した人達や、外国で新島先生を支援した人達にたくさんの手紙を出しています。その数、なんと50通を越えています(私にとってこの枚数は非常に多いと感じます)。枚数もすごいけど、私を注目させたのは枚数ではなく、手紙の内容です。

新島先生がまだ神様の事をよく知らない時の手紙は自分の考えがびっしり書いてありました。他にも、手紙を書いてある時の気分や立ち寄った所の説明も詳しく書いてあって、とても読みやすい手紙だなあと思いました。その中でも特に、弟の双六への手紙はとても長いにも関わらず、例えなどを多々使って分かり易く書いてありました。双六への手紙を読んで心に残った部分は、手紙に双六の事を心配していろいろな注意書きを添えておいたり、父や祖父や母の事を心配して、双六に父母を元気づけるようにと頼んだりしている所です。これから自分が大変になるのに家族の心配をするなんて脱国を決めるまで随分悩んだらうなあとは私思います。新島先生が家族に宛てたほとんどの手紙には追伸が付いていて、特に1865(慶応元)年3月の双六宛の手紙①は追伸が本文ぐらい長く書いてありました。新島先生は双六に言いたい事がたくさんあって、本当は今すぐにでも家族に会って見聞きした事を話したい!という思いがあるからこそ手紙がこんなに長くなったのかなあ?と思っています。

新島先生が聖書などを読み、神様のことを知った時の手紙は例えがほとんど聖書中の言葉を引用していました。『御霊の剣』とか『救いの兜』(1868年4月27日、ハーディ夫人に出した手紙②)などのキリスト教の信者から見れば神秘的な語句が多々使われていました。特に1869(明治2)年12月21日にH.Sテイラー船長の親戚宛の手紙③が良い例だと思います。比喻表現などがほとんど聖書から引用したものでした。しかもかなり熱っぽくプロテスタントを勧めていました。それだけ新島先生はプロテスタントを信仰しているのだなと思います。

さらに新島先生は1871(明治4)年2月25日に飯田逸之助に宛てた手紙④でカトリックを信仰している国よりプロテスタントを信仰している国の方が強いと熱く説いていました。『ポルトガル人が日本に来て伝えたカトリックはプロテスタントとは全然違うばかりか、極めて大きな誤りがある』や『インドは古い国だが、愚かな仏教を信奉したためにますます弱くなった』と他の宗教非難してまでプロテスタントを飯田氏に勧めています。何度も新島先生は『プロテスタントを信じ尊ぶ国は非常に繁栄する』と説いていますが、私はその言葉に、プロテスタントを日本に布教すれば、日本もイギリスやプロシア、アメリカの様な強国になるという意味が含まれていると考えています。きっと新島先生はこれから起こる戦争などの争いごとを予想して飯田氏にこの様な

助言したのだと思います。

新島先生が日本に帰国して同志社大学の設立運動をしている時、同志社英学校の生徒が『二年生上・下級合併問題』が原因でストライキを起こしてしまいます。ストライキは『自責の杖』事件により一旦収まりましたが、新島先生が吉野山で保養中、ストライキが再発し、徳富猪一郎氏他数名が退学しました。新島先生は徳富氏らが退学した後、徳富氏と河辺氏に手紙⑤(1880年6月29日)を出しています。その内容からは徳富氏と河辺氏の身を案じている新島先生の思いや、東京でのいろいろな誘惑に負けず、勉強に励んで欲しいという新島先生の願いを受け取ることが出来ます。新島先生はこの手紙を出す前に徳富氏にとって不愉快な説教をしたそうです。そして手紙に『憎ふては打たぬものなり竹の雪』という言葉を送りました。この言葉、何処かで見たなあと思いながら本をめくっているとやっぱり見えていました。祖父の弁治が新島先生(幼少期)の悪い癖を罰した時に言っていた言葉とよく似ていました。(祖父は『憎んでは打たぬものなり笹の雪』)新島先生は祖父からの愛情を受け、その愛情を生徒達にも受けさせ、そうやって生徒達を間違った道ではなく正しい道へ導いていこうとしたのだと思います。

新島先生の手紙は無駄がなく、とても参考になるような教えが多々ありました。この教えが今の日本に広く伝わったらいいなあとは思います。

〔注〕

①現代語で読む新島襄編集委員会編 『現代語で読む新島襄』 48頁 丸善株式会社 2000年

②同前 83頁

③同前 85頁

④同前 91頁

⑤同前 151頁

明治期における同志社と仏教

小村 愛美 (同志社国際高等学校3年)

『新島襄の生涯』、64ページ。ここに私がずっと興味を抱いてきた一節が書かれている。「私たちが京都に入るや否や、仏教の僧侶たちは何度も集会を開き、ついに私たちの追放を強く要求する請願を政府あてに送ったのであった」である。初めてこの箇所を読んだ時、私は疑問と興味とを同時に抱いた。僧侶達による反対運動の実態、それが同志社の前にどんな形の障壁となって立ち上がったのか、背景にあったのは何か、そして新島襄と同志社はどのようにそれを乗り越えたのか。そういった詳細な事柄を、私は知りたいと思ったのだ。授業ではあまり取りあげられなかったが、この一節は、6年間私の頭の隅に在り続け、時折思い出されては私の興味を掻き立ててきた。仏教勢力による、同志社設立反対運動。この同志社の歴史の一面を、私なりに考えてみようと思う。

—

同志社設立に対する反対運動は、当然ながら1875年に始まる。新島が京都に入り、〈私塾開業願〉を榎村権知事に提出した8月、「耶蘇教徒の新島襄が、耶蘇教の学校を京都に作るらしい」という噂が僧侶達の間に流れ始める¹⁾。彼らにとって面白い筈がないその噂は悪感情をもって迎えられるが、その時はまだ、「政府が許可する筈がない」と僧侶達も高を括っていた節がある。そして11月、〈同志社仮規則〉が貼り出されると、最初の公的な反対運動が起こる。デイヴィスが「私達の追放を強く要求する請願」と書いた、京都仏教教団から府に宛てた請願書である。「神仏各宗ト雖各自之教法(中略)説教御差許不相成義二候へ八彼耶蘇教ヲ以内地人民教誘不相成八勿論之義」であり「外国宣教師モ同様之義」、「断然御差止相成」²⁾ たし、と要求するこの請願書は、強い政治的影響力を伴った。同志社設立を認可した榎村権知事は、請願書が出された後に態度を硬化させた。開明主義者で知られた榎村も、仏教勢力と真っ向から事を構えるのを得策とは考えなかったからだ。新島が田中文部大輔と直談判の末とりつけた、宣教師雇い入れを許可する文部省の指令³⁾もその効力を半減させた。田中文部大輔直筆で、学校では聖書を教えない旨の確約を新島から取るよう、榎村に文書が届いたのである。やむなく新島は11月22日に府庁に出頭し、確約書を書いた。デイヴィスはこの事を「請願の唯一の結果」⁴⁾とだけ書いているが、この為に新島は何とか聖書の授業を可能にしようと苦心を強いられるのだから、やはり同志社に与えた打撃は大きかったと言える。僧侶達から府への苦情、陳情、同志社への直接的な妨害は、1876年に入ると更に激しさを増した。それまでも繰り返されてきた仏教徒たちの集会や代表達による陳情はより頻繁になり、デイヴィス、新島の家には連日石が投げ込まれた。

これらの妨害について詳しい資料は残っていないが、仮校舎近くの寺院で何度も集会が開かれ、時には僧侶達が押しかけたのか「仮校舎の門が大きな音を立てたりした」⁵⁾ 事もあったという。

それでも、その年の3月頃から反対運動は下火になる。僧侶はもとより、一般市民からも好意

を持たれているとは言い難い状況ながらも、同志社は暫しの平穩の間に徐々に生徒数を増やしていく。

二

明治13年以後、つまり1880年代、90年代に、仏教勢力の反対運動は再燃する。この時期の運動、いわゆる「耶蘇退治」は、一言で言えば「組織的に」⁶⁾ 展開され、幾つの特徴を具えている。まず攻撃の対象が京都に根を張り始めたキリスト教そのものに拵がった事。言論が攻撃の手段として用いられた事。「耶蘇退治」に対し同志社も負けじと反撃した事、等である。

火付け役となったのは81年に同志社が開いた「耶蘇教大演説会」⁷⁾ であった。これは、それまでじわじわと信者数を増やしていたキリスト教に仏教勢力が危機感を募らせていた所へ、同志社が突如一大イベントを催した形となり、仏教側を一気に刺激した。反撃の先頭を切ったのは東本願寺である。同年6月、彼らは京都交詢会⁸⁾ に依頼して排耶演説会を開いた。その後は正に演説会の応酬である。キリスト教側が仏教を批判すれば、仏教側も負けじと演説会を開く。双方の演説会には反対勢力の人間も多く聴衆として出席した為、弁士の演説中には轟々と野次が飛び、会場は殺気立ち時に乱闘にまで発展し、警察が出動することもしばしばであった。91年10月の四条・南劇場事件⁹⁾ などはその良い例だ。更にこれらと並行して仏教系の結社や擁護団体¹⁰⁾ も次々と生まれ、機関誌の紙面上で攻撃を開始した。当然キリスト教側もこれに対抗して新聞・雑誌に反論を寄稿する。こうしたキリスト教対仏教の様相の中、同志社と新島は格好の攻撃対象となり、仏教側が論陣を張れば一番に槍玉に挙げられ、それは同志社が大学設立運動を展開すると、更に激しくなっていく。

さて、仏教徒の激しい耶蘇退治に曝される中、新島は積極的に反撃することもなく、公には相手にしないという態度をとり続ける。とはいえ感情面では相当腹立たしかったようで、記録の上では一度だけ、ある演説会¹¹⁾ で「墨染之衣ヲキル身ナドニシテ、清閑寺ノ楊弓場ナドニ入り込ミ(中略)怠惰モノアリ」と僧侶を批判し、また卒業生への書簡の中でも、僧侶を「円頂先生」「丸る頭輩」と揶揄したりしている¹²⁾。日本の進歩の為と理想に燃えて大学設立に奔走していた新島にとって、それを妨害されるのは耐え難いことであつたろうし、また当時の僧侶、仏教系学校の生徒の風紀は墮落すること甚だしく、先に挙げた新島の演説稿にもあるように「楊弓場ナドニ入り込」む事など当たり前、浄土真宗の僧侶は花街の最上客と専らの評判であつたから、そんな彼らが宗教界、教育界に大きな勢力を持ち同志社の前に立ちほだかつた事は、新島の憤激をさらに強めたことと思われる。

その後も手を変え品を変え、仏教側の妨害は続く。1890年の第1回衆議院議員総選挙に同志社関係者の中村栄助が京都から立候補した時、仏教側も対抗馬を出して競ったが結局中村が当選した、といった記録も残っている¹³⁾。

三

同志社創立時から延々と続くこの反対運動を語る上で欠かせないのは、背景となった廃仏毀釈¹⁴⁾ と排耶運動である。明治政府のとつた神仏分離、神道国教化政策は、事実上の廃仏令として巷

間に伝えられ仏教界に打撃を与えた。この廃仏毀釈の動きの中、排耶運動が生まれる。廃仏毀釈に対抗し、勢力を削がれた仏教界を復興するべく仏教護法論¹⁵⁾が生まれ、徐々に日本国内へ浸透するキリスト教への反発と相まって排耶運動へと転じた。仏教系の結社が数多く結成され、講談会や演説会の開催、『耶蘇教国害論』、『耶蘇教之無道理』といった排耶書と呼ばれる書物の配布を中心として、キリスト教義の批判、江戸時代以来の反キリスト教意識の啓蒙が精力的に進められた。前に述べた、1880年代以後の同志社反対運動もこの排耶運動が根幹を成している。同志社を含む京都のキリスト教側と仏教側が激しく対立していた頃、全国的にも仏教各宗派が排耶運動を展開していたのである。

四

これまで述べてきた同志社に対する仏教側の攻勢の中にあって、特異とも言える事が一つある。同志社と相国寺¹⁶⁾との関係である。記録上、同志社と相国寺の間に諍いがあったという事実は残っていない。そればかりか卒業生の回想録の中には、休日に相国寺の境内で散歩したり、詩の朗読や演説の練習をしたという記述がある¹⁷⁾。相国寺との関係は、友好的ではないにしろ少なくとも敵対はしていなかった事が窺えるのである。更に、現在の同志社今出川キャンパス内には同志社の所有地と相国寺から借地権を得ている土地とが混在しているが、この最初の契約が取り交わされたのも、かなり早くからであったと思われる。

排耶運動の真っ只中であって、なぜ同志社と相国寺との間にこのような関係が成立し得たのか。そこには当時の相国寺管長、荻野独園禅師¹⁸⁾の存在があった。全ての要因がこの人に帰する訳でもないが、同志社と借地契約を交わした時の管長もこの独園禅師であったし、廃仏毀釈に対しては敢然と立ち向かった彼が、排耶運動に積極的に参加した形跡は無い。明確な資料は無いものの当時京都における排耶運動の急先鋒は浄土真宗であり、相国寺の属する臨濟宗の名はほとんど伝えられていないので確かな事だろうと思われる。借地契約に関しては、寺領を削減され経済的危機に瀕した寺を立て直す目的¹⁹⁾もあっただろうが、それも独園禅師が闇雲にキリスト教を排除するような人ではなかったからこそ、契約を承諾したのだろう。同志社が自ら好んで争おうとしなかったのは言うまでもないが、相国寺が同志社に対しこのような態度を取った事は、同志社が今出川に校地を構えそれを存続させてこられた要因の一つである事は否めない。

同志社創立の直前から続いた仏教勢力による反対運動。新島の生前も、死後も、同志社は仏教徒の攻勢に曝され、また闘い続けた。

やがて時代の変遷と共にその攻勢も止み、キリスト教は日本にその地歩を確立し、同志社は京都に深く根を下ろして今に至る。しかしその礎を築き、日本の社会からキリスト教排斥の空気を無くすきっかけを作ったのは、切支丹禁制が解かれて間もない頃²⁰⁾の日本に来たキリスト者達であり、京都においては新島と同志社もその一つであったと言える。それは自ら目指したものではないにしろ、同志社が歴史の中で確かに果たした役割の一つなのではないだろうか。

〔注〕

- 1) 吉村 康『心眼の人 山本覚馬』 285頁
- 2) 『同志社百年史』資料編Ⅰ 15頁
- 3) 文部大輔田中不二麿と新島とは、田中が岩倉使節団の一員として渡欧した時に新島が通訳を務めて以来の旧知の仲だった。当時文部省は外国人宣教師を雇い教員も兼ねさせる事は禁じていたので、新島は〈私塾開業願〉を出した直後東京に行き、田中を3日かけて説得してこの許可を取りつけた。
- 4) J.D.デイヴィス著・北垣宗治 訳『新島襄の生涯』 65頁
- 5) 前掲『心眼の人 山本覚馬』 301頁
- 6) 仏教側はキリスト教攻撃のための半職業的な活動家、いわゆる仏教壮士を雇った。彼らは演説会の弁士や、反対にキリスト教側の演説会の妨害、仏教擁護団体の結成、キリスト教伝道所への殴り込みなどさまざまな反対運動を組織した。代表的な壮士として美濃田覚念、大内青巒が挙げられる。(本井康博『京都のキリスト教—同志社教会の19世紀—』 243～247頁参照)
- 7) 「基督教大説教会」とも言われる。それまで同志社が月に1回開いていた「同志社演説会」が発展したもので、1880年5月17日に四条南劇場で開かれた。通常の学術演説会的なものとは性質を異にした純然たるキリスト教の伝道集会であったから、仏教側には強い衝撃を与えた。(本井康博「新島襄と仏教徒—初期の同志社をめぐる仏教会の動向」『新島研究』No.77 45～46頁参照)
- 8) 慶応義塾の卒業生を中心とした団体。東本願寺はここから弁士を雇い、演説会を開いた。(同前 46頁、『京都のキリスト教—同志社教会の19世紀—』巻末年表参照)
- 9) 1891年10月17日の、市内六教会共同で開催されたキリスト教演説会で起きた事件。猛烈な野次や一人の僧侶が壇上の弁士に詰め寄ったことから口論、殴り合いになり、流血沙汰にまでなったため途中で散会したと伝えられる。(『京都のキリスト教—同志社教会の19世紀—』 242～243頁参照)
- 10) 大内青巒が結成した「尊皇奉仏大同団」が代表的。(同前247頁、前掲「新島襄と仏教徒」 49～51頁)
- 11) 1882年10月28日の同志社演説会。(前掲「新島襄と仏教徒」 47～48頁)
- 12) 同前 46～47頁参照
- 13) 前掲『京都のキリスト教—同志社教会の19世紀—』 248～249頁
- 14) 明治初期に行われた仏教弾圧の総称。神道を国教とし仏教勢力を抑制しようとする明治政府の政策により、神社の神主を兼ねる僧侶に還俗命令が出されたり、広大な寺領の削減などの布達が出された。政府としてはあくまで抑制が目的であったが、地方では寺が打ち壊されるなど弾圧、迫害が多発した。
- 15) 仏教の教法を守護する説。廃仏毀釈によって弱体化した仏教界を守ろうとする意識から生まれ、幕末期から明治期にかけていくらかの変質を見せるがキリスト教は排除すべしという姿勢は変わらず、排耶運動の母体となる。
- 16) 臨濟宗相国寺派の大本山。室町時代に開かれ金閣寺・銀閣寺など90余りの末寺を有する名刹。
- 17) 河野仁昭 新島講座『新島全集をめぐって—新島襄と仏教徒たち—』 16頁
- 18) 相国寺第126世。1870年に住職に就任し政府の大教院教頭も務め、禅宗三宗を束ねる。廃仏毀釈に対して政府の非を鳴らし、仏教各宗派との連携などをもって抵抗した。大教院解散後は相国寺住職として後進の育成に専念し、77歳で没した。
- 19) この当時全国の寺と同様に、相国寺も寺領を削減され財政の危機に陥っていた。独園禅師は他にも寺に所蔵していた花鳥画を宮内省に献じ、その下賜金で寺の財政を救った。
- 20) キリスト教宣教の自由が認められたのは1873年、同志社創立の2年前だった。

〔参考文献〕

- 河野仁昭 新島講座『新島全集をめぐって—新島襄と仏教徒たち—』同志社大学出版部 1985年
- J.D.デイヴィス著・北垣宗治訳『新島襄の生涯』同志社大学出版部 1992年
- 新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』第三巻書簡編Ⅰ 同朋舎 1987年
- 上野直蔵編『同志社百年史』資料編Ⅰ 学校法人同志社 1979年
- 吉村康『心眼の人 山本覚馬』恒文社 1986年
- 本井康博『京都のキリスト教—同志社教会の19世紀—』日本キリスト教団同志社教会 1998年
- 本井康博「新島襄と仏教徒—初期の同志社をめぐる仏教界の動向—」同志社新島研究会編集委員会編『新島研究』No.77 同志社新島研究会 1990年
- 相国寺・金閣寺・銀閣寺 <http://www.shokoku-ji.or.jp/> 相国寺 2004/10/1
- 南山大学図書館紀要「排耶書『護国新論』、『耶蘇教之無道理』にみる真宗本願寺派の排耶運動」
<http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/publication/bulletin/kiyo7/kiyou10.htm>
小林志保、栗山義久 2004/10/1
- 廃仏毀釈 <http://www.tabiken.com/history/doc/O/O206C100.HTM> 旅研2004/10/3

第163回 新島襄生誕記念会

日時：2006年2月10日(金) 17:00-19:30

場所：同志社新島会館大研修室

表彰

新島研究論文賞 本井康博氏 (同志社大学神学部教授)

新島研究功績賞 井上勝也氏 (同志社大学名誉教授)

記念講演

演題：「新島襄と女性教育—もう一つの志—」

講師：坂本清音氏 (同志社女子大学名誉教授)



新島襄生誕記念懸賞論文(2005年度)

入選者

【中学校の部】

最優秀賞 高橋 佳奈子 (同志社女子中学校1年)
「『新島襄』という一人の人間」

優秀賞 井辻 藍子 (同志社中学校1年)
「新島襄と山本覚馬」

藤田 かるな (同志社女子中学校1年)
「校章の意味とこれからの私」

佳作 大西 千晶 (同志社女子中学校1年)
「同志社と女子教育」

菅野 幹也 (同志社中学校1年)
「新島襄とキリスト教」

鈴木 碧 (新島学園中学校3年)
「一ドルに込められた想い」

松尾 茉莉子 (同志社香里中学校2年)
「World of Joh Nijima」

【高等学校の部】

最優秀賞 石津 裕基 (同志社国際高等学校3年)
「新島襄—社会の根底に身を捧げた男」

優秀賞 杉野 ゆりか (同志社国際高等学校3年)
「Joe as a Missionary~Dedicating His Own Life for the Gospel~」

藤岡 希怜 (同志社国際高等学校3年)
「国を愛していますか?—新島襄の愛国心」

佳作 新江 進 (基督教独立学園高等学校2年)
「真の教育者・新島襄」

川元 佐名絵 (同志社香里高等学校1年)
「私の良心の自由」

田村 直之 (新島学園高等学校3年)
「新島襄と明治の精神」

堀田 昂佑 (同志社国際高等学校3年)
「今に残る同志社のメロディ~同志社と音楽~」

「新島襄」という一人の人間

高橋 佳奈子(同志社女子中学校1年)

「新島襄」という一人の人間。それは一人の人間でありながら、とても大きな存在です。何で彼は大きな存在なのか。私にはよく分かりませんが、彼の人を引きつける何かによるものだと思います。では彼の人を引きつける何かとはどういうものかと考えると、これは思いのほか複雑で、とても奥が深いものです。そこで彼のすごいところ、人より優れているところについて考えてみようと思います。

まず第一は、彼の志です。彼の志はとても雄大で、「千里の志」などと言われています。初めは「外国の知識を学びたい。」そして「キリスト教についてくわしく知りたい。」アメリカに渡ってキリスト教を学んでからは「日本にキリスト教学校を創りたい。」など、彼は志を持ち続け、そして純真な心を失いませんでした。雄大な志というのは、大抵心に抱いただけで終わってしまうものです。だけど彼は抱いた志を実現させました。人より雄大な志なのに、それらを実現させてしまいました。今の私達には、普通のちょっとした志すら実現することは困難だと思います。

第二は、彼の巧みな話術と行動力です。この二つがあったからこそ彼は志を実現することができたのだと思います。例えば、ひそかに人に頼み込んで函館行きの船に乗り込んだり、国禁を犯してアメリカに渡ったり、演説して寄付金を募りキリスト教学校を創ってしまったりと、少くく話術や行動力があってもできそうにないようなことをたくさんしています。思うだけで行動に移せない私とは大違いです。

第三は、神への信仰心です。いくら行動力があっても、密出国は友も家族もすべてを置いて、未知の世界へと旅立ち、運命を大きく変えてしまう一歩を踏み出すことであり、とても辛いものだったはずですが、けれども彼は恐れませんでした。なぜなら彼は神への強い信仰心を持っていたからです。神のみ手に自分の運命をゆだねることができたからです。神はいつでも自分を見守っていてくれると信じ、神を自分の父として神に仕え神のために生きる。それは簡単なようでとても難しいことです。毎日欠かさずたくさんの人のために祈り、毎日勉学に励む。彼はこんな人だったから、人々に好かれ、神に好かれたのではないかと思います。神は皆を愛します。だけど彼は特別愛されていたように感じます。一生懸命な気持ちは天に届くということでしょうか。熱心な祈りは神に届くということでしょうか。私は神ではないから分かりません。だけどそういうことだと思います。神への信仰心の強さが、彼が神に愛された理由だと思います。また、彼は神に愛されていたからこそ、キリスト教学校の設立という、常人にはできそうにないようなことを成し遂げることができたのだと思います。神との出会いが彼の運命を大きく変え、彼の人生を大きく変えました。それは偶然ではなく、神の導きです。このように神に導いてもらったのは、彼の信仰心がとても強かったからだと思います。

彼には他にはたくさんの優れているところがありますが、神への信仰心ほど強いものはないと

思います。だから彼は、神に愛され、人々にとってなくてはならない大きな存在となっていたの
かもしれません。

けれども神は疑い深い方なのでしょう。彼が健康を損ねても、神への信仰心を失うことがない
かどうかを試されたのだと思います。人は病にかかると心も弱くなりがちです。しかし彼は病に
かかり、それでもなお神を信じ続けました。そして人生の終わりが訪れようとも、神のみ旨に行け
るのならと決して生に縋るようなことはしませんでした。ただ後に残していくもののことを案じ、
そのことのみを心配していました。こんな彼だからこそ、今は神のみ旨で安らかに眠っているこ
とと思います。

私はこのような彼、新島襄が創った同志社女子中学校で、精一杯勉学に励み、新島襄のような
大きい存在となれるように日々努力しようと思います。また、同志社のために尽くしてくれた新島
襄のために、これからは毎日祈ろうと思います。

〔参考図書〕

現代語で読む新島襄編集委員会編 『現代語で読む新島襄』 丸善株式会社 2000年

新島襄—社会の根底に身を奉げた男

石津 裕基(同志社国際高等学校3年)

新島は官吏にならなかった。封建社会の限界を悟り国禁を犯してまで渡米し、凡そ8年に及ぶ在米生活を経験し、政府公認の遣米欧使節団にも約1年間随行した新島が官界入りするのに、不足する点があっただろうか。しかし新島は自らこれを願ひ下げた。

新島が関った政治家は、校内視察や大学設立運動に協力した伊藤博文・大隈重信を始め、彼を頼むべき一友とした木戸孝允、津田仙から紹介を受けて師事を仰いだ勝海舟など数多い。これだけの人脈を有していながらも、しかし新島は政治の世界に入ることはなかった。当時官界に活躍した政治家の面々と比べ、社会的身分や政治的業績を引合いに出した際、何彼と新島が見劣りするのを否めないのは、彼が官吏としての成功を収めるに至らなかった所為なのか。私はこれを否定する。新島が官界入りを拒んだのには相応に理由があるからだ。本論ではその理由を解き明かし、新島という男を新しい観点から捉え直してみたい。

論を展開するにあたり、新島を官途に就くよう勧めた人物が少なくなかったことを予め断っておきたい。例えば田中不二麿は文部省の高官として新島を勧誘した。少弁務使として新島と出会った森有礼も費用全額負担という好条件で、同じく森から噂を聞いた黒田清隆開拓使も彼の登用を試みた。しかし新島が彼等の誘いに乗ることは終になかった。

これには新島の持つ国家への帰属意識の程度と自我の精神が深く関係しているように思われる。新島は国禁を恐れず脱国を果たした。そこには当然アメリカへの憧れの念も含まれていたであろうが、それにも増して封建社会という日本の国家体制に対する嫌悪が大きく影響していたのも事実である。加えて「私の青春時代」にも記されている通り、新島は弱冠21にして日本が必要としているものは物質的な進歩よりも道徳的な改革であると判断している¹⁾。当時の新島がどれほどの確固たる信念を持ってこの言を発したかについては後に譲るとして、彼の目には少なからず国家が国益ばかりを重視し、物質文化の助長を促しているに映ったのだろう。当時の国家を嫌悪して国を脱し、日本における道徳的改革、つまり精神文化の促進を訴える彼にとって、物質的進歩を最優先する国家に、どれほどの帰属を必要とし、また求めるものがあっただろうか。ワシントンにて新島が岩倉使節団の依頼を受け、田中不二麿文部理事官と面会した際の出来事に関してハーディー夫妻に宛てた手紙からも、それは容易に判断できる。新島は大胆にも田中に、日本政府から費用を受けている他の留学生の立場と自分のそれとを明確に分けるよう訴え、自分が単なる「政府の下僕」ではないことを強く主張した²⁾。また嘗て新島と部屋を同じくした寮友の一人は、先に述べた森有礼の勧誘を断った件について、彼は誰の家来にもなる気がないのだ、と語ったという³⁾。これらが指し示すのは、つまり新島が日本という国家に帰属して働く意思は皆無に等しかったということである。またそれは同時に、彼がアメリカの進んだ文化に早くも影響を受け、所謂近代的自我の確立を果たし、個人の尊厳と自由を手に入れたことを意味している。大学

設立にあたり、倜儻不羈なる学生を圧迫せず⁴⁾、彼等が独自の気性を発揮し、自治自立の精神を養うことに意義を求めた⁵⁾ 新島が、国立という名を借りずに私学教育の必要性とその特性⁶⁾ を説いたのも、このためである(無論政府の要人も大学設立のため資金を寄付しているが、これは新島個人とその人との関係であり、国からの直接的な援助と捉えるべきではない)。国家への帰属を必要とせず、何物にも束縛されない自我を求める姿勢、これが新島を官界入りさせなかった一つの要因であることは疑いないだろう。

しかしこれはあくまで一つの要因であり、根本的な原因は別にあると私は考える。それは国家への帰属云々を超える、新島が異国で学び得たものの中で最も崇高たる理念であり、教訓でもあろう、確かな信念の発見である。その信念とは、奉仕の精神である。新島が若くして日本に道徳的改革が必要であることを悟ったのは前述した通りだが、果して両親や祖父を国に残してまで、止まることを知らない知識欲のために千里の志を抱いて脱国した彼が、帰属意識すら持たない国家に対してどれほど真心をもって道徳的革新を訴えたのか疑問に残るところがある。思うに、彼はこの時点では彼方に広がる異国の大地に馳せる思いが強く、自身が真実にそれを国の重大事として受け止めることはなかったであろう。脱国の理由を突き詰めてみれば、それは寧ろ主我的であり、彼自身、弟の双六に宛てた手紙の中で自分の行為を、許され難い罪⁷⁾ と書き記しているほどだ。

しかし約8年に及ぶアメリカでの生活は、新島の精神に不動の信念を確立させるに十分な環境と時間を与えた。新島が喜望峰を回って行き着いた先は、広い米国のうち大西洋岸北部にあたるニューイングランドであった。この地域は、所謂イギリス清教徒(ピューリタン)の一派であるピルグリム・ファーザーズ(巡礼者父祖)が移住し、最初の植民地を拓いたことで知られている。その子孫たちが当時も根強くこの地に住み着き、基盤を支えて伝統を守り続けていたので、この土壌の中で生活を営むことになった新島が、自然とピューリタニズムを彼の精神の礎としていったのも納得できる。新島が在籍したフィリップス・アカデミーとアーモスト大学も、この清教徒思想の強い学校であった。特にアーモスト大学で新島はニューイングランド神学に強い関心を示し、それを通じて人間の自由とは何かを模索する機会を得ることができた。

この恵まれた環境の中で、惜しみ無い時間を費やして新島が悟り得た答えが、前述した奉仕の精神であったと私は推測する。人は外から自由を与えられるのではなく、良心を以てして内発的な道徳意識に従うことでのみ、それを得られると新島は確信するに至ったのだ。つまり他者に対する自発的な自己犠牲の奉仕、新約聖書の言葉を借りるとすれば、正にアガペーの実践こそが、新島の求める理想的な姿となったわけである。出国時、主我的な観点から漠然と精神文化の必要性を感じた新島は、利他の精神を以て自らが道徳的改革を推し進めるという明確な信念を携えて原点回帰を果たし、母国に戻ってきた。まず新島は道徳的改革の基軸を政治ではなく教育に定めた。「同志社大学設立の旨意」にも記されているように、新島はアメリカの文明社会が、偏に熱心な国民の教化によって形作られたものだと確信していた⁸⁾。また教育は「一国の一大事業」⁹⁾ であり、的外れの教育が国に及ぼす影響も重々認識していた¹⁰⁾。よって新島は文明の根本¹¹⁾ をなす徳の育成を日本で実践するべく、官界という高所からではなく、国民を最も近い目線で教え導くこと

のできる、社会の根底たる教育界に身を奉げる決意を固めたのである。

さて、これまで新島が官界入りを拒んだ所以を探ってきたが、ここで私の考える新しい新島像について少し所見を述べたいと思う。それは「日本の救い主としての新島襄」という見方である。その気にさえなれば、官界入りして日本の政治に携わることも十分可能であったのに、敢えて厳しい反対運動にも怯まずキリスト教に基づいた学校を創設し、国民の教化に身を奉げた新島の信念は、正に不撓不屈の精神と呼ぶに相応しい。これを可能にしたのが、新島が日本に対して持つ愛国心でなくて他に何が有り得るだろうか。「国家」という政治社会の枠組みに帰属を求めない彼だからこそ、純粹に日本という「国」を愛し得たのだ。仮に新島が愛国の情を求めない人物であれば、アメリカ国籍を取得せずに帰国を求めた¹²⁾理由がどこにあるというのか。

その愛する国に、新島は徳育を以てして、物質的進歩に直走る社会が作り出す欠損を補う役割を果たした。例えば女子教育の実践がそれである。「同志社女学校広告」にもあるように、この当時既に女性の権利は少なからず認められていたが、新島は更なる権利の拡張を望んで女学校を設立し、加えて徳の育成にも力を注ぐべきだと主張した¹³⁾。男性と女性の平等な権利を維持するためには、両性共に公平な精神教育を受けるべきだと説いたのである。また「地方教育論」では東京に一極集中化する不公平な教育事業を憂い、地方での教育活動を強く奨励している¹⁴⁾。このように、日本の政府が見落していく文明社会の基盤に転がる問題に、特に注意を払う新島。彼の日記の中の一文、I will pay a special attention on the poorest scholar in the class¹⁵⁾には、何もこの特定された生徒のみでなく、彼の愛する国も含めた全てに対して「社会や組織が見捨てていく何か」を救う精神が溢れ出ているように私は感じる。外界から目立つことのない社会の根幹に生き、惜しみなくその身を奉げたイエス・キリストと彼が似通って見えるのは、果して私だけであろうか。先の寮友の言葉に補足を加えるとすれば、新島は唯一神に仕えることを望み、それを実践しようとしたのではないだろうか。

物質文化を追い求める日本に何れは限界が来ることを悟り、道德の革新を逸早く、官界からではなく教育界から実践し、国の行く末に警鐘を鳴らした日本の救い主・新島襄。この国民の教化を以て日本の未来を動かす「英雄」の養成に身を奉げ、社会の基部に生きた人物を、当代の政治家達と比較して見下げることが如何に軽薄で愚かな行為であろう。イエスが人類の罪を背負って死んだ後「復活」を果たしたように、新島も愛する国のため、国民のために病苦を忍んでまで、一つの目的に晩年の全精力を奉げた。新島の「復活」は、彼の没後22年の時を経て実現されることとなった。言わずもがな、同志社大学の創立である。創立130周年を迎えた今も尚、新島精神はここに受け継がれ、息衝いている。

〔注〕

1) 『新島襄全集』7 22頁

Japan needs a moral reformation more than mere material progress.

2) 『新島襄全集』6 96頁

So he had no right to treat me as a slave of the Japanese government.

-
- 3) 『現代語で読む新島襄』 289頁
 - 4) 『新島襄全集』4 403頁
同志社ニ於てハ個儻不羈なる書生ヲ圧束せず務めて其の本性ニ従ひ之ヲ順導し以て天下の人物ヲ養成す可き事
 - 5) 『新島襄全集』1 137頁
然れども其生徒の独自一己の氣象を發揮し、自治自立の人民を養成するに至つては、是れ私立大学特性の長所たるを信ぜずんば非ず
 - 6) 「同志社大学設立の旨意」より考察すると、新島は、国民が自分の子どもの教育を政府の手だけに任している現実を嘆いた。学生が独自の氣質を發揮し、自治自立の精神の育成を目指す情操教育の必要性を、彼は私学に求めたのである。
 - 7) 『新島襄全集』3 21頁
其罪難許
 - 8) 『新島襄全集』1 130頁
米國文明の決して一朝偶然にして生したる者に非ず、必ず由て来る所の者あるを知る、而して其来る所の者、偏へに一國教化の敦きより生するを察し
 - 9) 『新島襄全集』1 137頁
教育は實に一國の一大事業なり
 - 10) 『新島襄全集』1 138頁
若し教育の主義にして其正鵠を誤り、一國の青年を導いて、偏僻の摸型中に入れ、偏僻の人物を養成するが如き事あらば、是れ實に教育は一國を禍ひする者と謂はざる可からず
 - 11) 『新島襄全集』1 131頁
獨り其外形物質上の文明を模倣するに止まらず、必ず其根本に向つて力を尽さざる可からざるを信じ
 - 12) 『教材 新島襄』 33頁
 - 13) 『新島襄全集』1 11頁
本校ニ於テハ專ラ婦徳養成上に注意シ
 - 14) 『新島襄全集』1 408頁
教育ニ付テ論スルニ何ノ差別モアルマシキニ
我國ノ教育ノ如キハ「東京」中央ニ集リ、何学モ中央ニ行カネハ學問ノナキ事ニ成行キ
 - 15) 『新島襄全集』7 330頁
‘A Best Method of Teaching’中の一文

〔参考文献〕

現代語で読む新島襄編集委員会編『現代語で読む新島襄』丸善株式会社 2000年

教材新島襄編集委員会編『教材 新島襄』新教出版社 2000年

新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』同朋舎

- 1 教育編 1983年
- 3 書簡編Ⅰ 1987年
- 4 書簡編Ⅱ 1989年
- 6 英文書簡編 1985年
- 7 英文資料編 1996年

新島旧邸

ボストンの友人J. M. シアーズの寄付によって建てられた新島襄の私邸で和洋折衷の木造二階建て日本人住宅として、また、同志社創立者の旧居として価値が高く、1985(昭和60年)に家具・調度類を含めて京都市有形文化財に指定された。

■公開日

3月～7月、9月～11月の毎週水・土・日曜日(ただし祝日、休日は除く)
春と秋の京都御所公開期間(連続5日間)
11月29日(創立記念日)

■公開時間

10:00～16:00

<2005年度見学者数>

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	3月	合計
1,047人	895人	605人	272人	606人	646人	1,407人	578人	6,056人

委員会

同志社社史資料センター委員会委員(2005年度)

伊藤 彌彦	同志社社史資料センター所長	菊地 登	高等学校
田端 信廣	教務部長	西山 啓一	香里中学校・高等学校
森田 雅憲	企画部長	太田 信幸	女子中学校・高等学校
西村 卓	大学人文科学研究所長	敦賀 昭夫	国際中学校・高等学校
工藤 和男	大学歴史資料館長	竹山 幸男	中学校
中山 健二	総務部長	本井 康博	大学神学部教授
植田 弘	法人事務部長	出原 政雄	大学法学部教授
小崎 眞	女子大学	田中 真人	大学人文科学研究所教授

同志社社史資料センター運営委員会委員(2005年度)

伊藤 彌彦	同志社社史資料センター所長	竹山 幸男	中学校
西村 卓	大学人文科学研究所長	本井 康博	大学神学部教授
植田 弘	法人事務部長	出原 政雄	大学法学部教授
小崎 眞	女子大学	田中 真人	大学人文科学研究所教授
太田 信幸	女子中学校・高等学校		

事務局	所長	伊藤 彌彦
	事務長	九鬼 弘一
	担当課長	馬淵 吉倫
	社史資料調査員	小枝 弘和
	社史資料調査員	栗原 真美

同志社社史資料センター規程

2004年4月24日制定
2004年5月 1日施行

(設置)

第1条 本学同志社社史資料センター(以下「センター」という。)を置く。

務を統括する。

- 3 所長の任期は1年とし、再任を妨げない。

(目的)

第2条 センターは、創立者新島襄並びに同志社関連資料の収集、整理、保存及び公開業務を継続、発展させ、同志社創立以来の歴史と伝統を後世に継承していくとともに同志社教育の充実と発展に寄与することを目的とする。

(同志社社史資料センター委員会)

第5条 センターに同志社社史資料センター委員会(以下「センター委員会」という。)を置き、以下の事項について審議する。

- (1) センターの事業に関すること。
- (2) 社史資料調査員の候補者推薦に関すること。
- (3) その他必要な事項。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するために、以下の事業を行う。

- (1) 同志社社史資料の研究、収集、整理、保存及び公開に関すること。
- (2) 新島研究に関すること。
- (3) 同志社社史編纂に関すること。
- (4) 『同志社談叢』の発行に関すること。
- (5) Neesima Room の管理運営に関すること。
- (6) ハリス理化学校記念展示室の管理運営に関すること。
- (7) 新島遺品庫の管理運営に関すること。
- (8) 新島襄旧邸の管理運営に関すること。
- (9) 新島襄及び同志社建学の精神についての啓蒙活動に関すること。
- (10) その他センター設置の目的に照らして必要と認められる事業。

(センター委員会の構成)

第6条 センター委員会は、次の者をもって構成し、委員は学長が委嘱する。

- (1) 所長
 - (2) 教務部長、企画部長、総務部長、人文科学研究所長、歴史資料館長及び法人事務部長
 - (3) 女子大学、高等学校、香里中学校・高等学校、女子中学校・高等学校、国際中学校・高等学校、中学校から各1名
 - (4) 学識経験者若干名
- 2 第1項第3号に掲げる委員は、各学校長の推薦により学長が委嘱し、その任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。
 - 3 第1項第4号に掲げる委員は、所長の推薦により学長が委嘱し、その任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。
 - 4 センター委員会は、所長が招集し、議長となる。

(所長)

第4条 センターに所長を置く。
2 所長は、学長が任命し、センターの業

- 5 センター委員会は、委員の過半数をもって成立し、議事は出席者の2分の1以上の賛成をもって決する。ただし、第5条第2号に係わる議決は出席者の3分の2以上の賛成を必要とする。

(運営委員会)

第7条 センター委員会に同志社社史資料センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

- 2 運営委員会は、第3条に掲げる事項について計画立案し、センター委員会の議を経てその実施にあたる。

(運営委員会の構成)

第8条 運営委員会は、次の者で構成する。

- (1) 所長
- (2) 第6条に掲げる者のうち所長が任命する者若干名
- (3) 所長が必要と認めた者若干名
 - 2 委員の任期は1年とし、再任を妨げない。
 - 3 委員会は、所長が招集し、議長となる。

(事務室)

第9条 センターに事務室を置く。

- 2 事務室に職員若干名を置き、センターの事業、委員会に関わる事務、その他必要な事務を行う。
- 3 センターの事務組織は、同志社大学事務機構規程に定めるところによる。

(社史資料調査員)

第10条 事務室に社史資料調査員たる職員若干名を置く。

- 2 社史資料調査員は、社史資料の収集、整理、調査、企画、展示等の業務を行う。
- 3 社史資料調査員の選考に関する事項は、別に定める。

(事務の所管)

第11条 この規程に関する事務は、同志社社史資料センター事務室が行う。

(改廃)

第12条 この規程の改廃は、センター委員会の議を経て大学評議会で行う。

附 則

この規程は、2004年5月1日から施行する。

同志社大学
同志社社史資料センター報 第2号

発行日 2006年5月25日
編集・発行 同志社大学 同志社社史資料センター
〒602-8580京都市上京区今出川通烏丸東入
Tel. 075-251-3042 Fax. 075-251-3055
<http://joseph.doshisha.ac.jp>

表紙：新島襄が英文日記に描いたスケッチ